



永澤 才吉 (永澤家提供)

蛇口を回せばきれいで安全な水が出る。今の日本ではそれが当たり前になりました。でも考えてみてください。自分の家に水が届くまでには、どのくらいの時間がかかっているのでしょうか。どの家庭でも水が出るようになるまでにはどのような苦勞があったのでしょうか。

永澤才吉は、天保十一(一八四〇)年、古川に生まれました。才吉は若いころから、いったんやると決めたら後には引かない性格で、何事も最後までやりとげる強い意志をもっていました。才吉の働きぶりは、人々の間でうわさになるほどでした。

さて、才吉が生まれた古川はどんな土地だったのでしょうか。今では大崎市と呼ばれ、そこに広がる大崎平野はおいしいお米の産地として有名です。しかし、昔は飲み水に苦しんだ歴史があったのです。

明治時代のはじめごろ、古川は村でした。村の中心部を流れる緒絶川の水は主に田んぼや畑に使われていました。飲み水にするには汚れがひどく、当時の人々は井戸をほって水をくんでいました。しかし、井戸からくんだ水も、金気水と言われる黄色くにごった水でした。古川村の人々は口をそろえて、

「飲み水を何とかしなくては。」と叫びました。

そんな中、明治十二(一八七九)年、全国的に大きな事件が発生しました。コレラという恐ろしい伝染病の流行です。コレラはコレラ菌という病原菌によって起こる病気で、汚れた水や食物を通して感染すると考えられていました。全国で十六万人が感染し、そのうち十一万人の人々が亡くなったのです。村の人々はコレラ

を防ぐためには、きれいな水が必要だと考えました。古川村の議会では水道工事することを決めました。このころに古川村の戸長に選ばれたのが永澤才吉でした。明治十五(一八八二)年、才吉が四十代半ばのことでした。

「これで水道工事が進められる。水道を作って古川の人々を救うのだ。」

才吉は、水道によって人々の生活や古川の未来を守ろうと決意しました。しかし、その予算は、古川村の約四年分に当たる、とてつもなく大きなものでした。その費用の大きさから、村民の反対運動が起こりました。「そんなお金をどうやって用意するんだ。村人の暮らしはどうなるんだ。」

悪いことは重なるもので、あの恐ろしいコレラが再び流行しました。古川村でも百四十人もの人が感染し、六十人以上の人が亡くなりました。水道工事を進めるどころではありません。人々の反対の声はますます大きくなるばかりでした。

「コレラの原因は汚れた水にあるのだ。水道ができれば人々を助けることができる……。」

才吉は人々に水道の必要性を強くうたったえました。水道の完成のためには時間もお金もおしくありませんでした。才吉は自ら三千円(今のお金で約七千万円)もの財産を投じて、水道工事の設計を進めました。議会の賛成は得ましたが、工事を進めるには村の人々を納得させなくてはなりません。不満の声はなかなか収まらず、反対する人々から陰口を言われ、時には命の危険を感じることもあったほどでした。

才吉は、費用節約のために材料を安くする工夫を提案したり、県令(現在の知事)に直接申し出て、古川の水道工事を進めることを強く願い出たりす



天保…
江戸時代の年号。

金気水…
鉄分が含まれた水。

戸長…
今の市町村長に当たる人。

るなど、できることは何でもやりました。村の人々にもねばり強く語り続けました。たった一人で、来る日も来る日も説得を続けるのでした。

「必ず、必ず分かってもらえる日が来る……。」

才吉の村や人々の幸せを思う気持ちには、少しずつ人々の心を動かし始めました。真剣な才吉の姿に、人々の心も変わっていったのです。才吉の呼びかけに賛同する人が次第に増え、多くの人々が集まって「水工会」という会が結成されました。集まった人々がお金を出し合い、四千四百円（今のお金で約一億円）というお金も用意することができました。

いよいよ近代的水道工事が始まりました。工事は簡単ではありませんでした。源水から取った水は人工的な池に導かれ、その水を三段階のろ過を経てきれいにしてから村の中心部に送るといふ近代的な仕組みでした。村の中心部までは約八キロメートル。そこまでを一本の長さが約六十センチメートルの管でつなぐのです。それは気が遠くなるような工事でした。しかも、費用は当初の予算をはるかに上回りました。村の人々から、再び反対運動が起こることもありました。それでも才吉は最後まで人々を説得したり、厳しい環境の中で工事を続ける人々に食料を分け与えたりしながら、水道の完成を願いました。村の人々を救いたいという才吉の気持ちは、最後までゆらぐことはありませんでした。

そしてとうとう工事が完了したのです。明治十七（一八八四）年、三月のことでした。

いよいよ水が通るといふ日、才吉は村の中心部で水が流れてくるのを待ちました。水が出る予定の時刻は午後三時。しかし、水はなかなか通じません。

一時間経っても水は流れません。二時間……三時間……三時間半……。

とその時、井戸の中にごう音がひびきました。水は白いしぶきをあげて勢いよく流れ出しました。「水だ。水が出たぞ。」

周囲から大歓声（だいかんせい）がわき起こりました。村の人々の喜ぶ姿があふれる中、才吉は、体のふるえを押さえることができず泣きました。そして静かにこぶしを握りしめるのでした。

その時のことを後に才吉はこう語っています。

「一時間、二時間と緊迫（きんぱく）の時は流れたが、その兆候（ちようこう）なし。別の井戸をのぞいたがこれまた兆候なし。待つこと三時間半、夕闇（ゆふやみ）迫る頃、突如（とつじょ）、井戸内に異様な音（いようおん）鳴り、『岩（い）をも通す』のことわざどおり、水が白い奔流（ほんりゅう）となって流れ込んできた時、思わず感動（かんとく）の涙（なみだ）堪（こ）えることができず。」

才吉は人々の幸せと古川の発展（はってん）を願ひ続けました。才吉は九十七歳でこの世を去るまで、古川の水道を見守り続けました。

今も、古川の水道は、人々が安心して飲めるおいしい水を送り続けています。



兆候：
前ぶれ。

奔流：
いきおいのほげしい流れ。

堪える：
がまんする。

永澤 才吉

永澤 才吉は、天保十一（一八四〇）年、古川（現在の太田市）に生まれた。コレラの流行をきっかけに水道の必要性を強くうったえ、人々の幸せを願ひ続けながら、多大な工事費用の問題や住民の反対運動など数々の困難を乗り越えて、宮城県で初めて水道設備を完成させた人物である。